

まほうの鏡

かがみ

昔むかし、あるところに、ひとりの狩人がいました。狩人は、毎日森へ狩りに出て、たくさんえものをしとめました。

ところがある日のこと、いつものように狩りに出て、夕方まで走りまわりましたが、えものはいっぴきもとれませんでした。狩人は、

（えものを見つけるまでは、家に帰らないぞ）と思って、そのばんは森の中でねました。朝になつて、海辺までやつて来ると、すなはまに大きな魚がいっぴき、うちあげられてもがいていました。狩人は、魚を海の中に投げもどしてやりました。すると、魚が、「お礼に、何をさしあげたらいいでしょう」といました。狩人が、

「何もいらないよ」と答えると、魚は、

「では、私のうろこを一枚お取りなさい。助けが必要になつたとき、そのうろこをもやせば、すぐにあなたのもとにかけつけますから」といました。

狩人は、魚のからだからうろこを一枚取つて、ポケットに入れました。

それからしばらく歩いていくと、野原に出ました。そこに、とてもなく大きな木が一本はえていました。狩人はその木の下でひと休みしました。うとうとしていると、何かの音で目がさめました。起きあがつてあたりを見まわすと、大きなへびがいました。へびは、木の上のワシの巣をねらつて登つていくところでした。巣の中にはひな鳥たちがいるだけで、親のワシはいません。狩人はすぐさまてっぽうをかまえて、へびをうちころしました。そして、また横になつてねむりました。

しばらくすると、親鳥たちが巣にもどつてきました。そして木の下に狩人を見つけると、いつもひな鳥を取つていくのはこいつだなと思つて、おそいからうとしました。そのとき、ひな鳥たちがさけびました。

「その人に手を出さないで。その人は、へびをやつつけてくれたんだよ」

それを聞くと、親鳥たちは、羽を広げて、ねむつてゐる狩人のためにかげを作つてやりました。

やがて、狩人が目をさますと、親鳥たちは、

「子どもたちを助けてくださいたお礼に、何をさしあげたらいいでしょう」といいました

た。狩人が、

「何もいらないよ」と答えると、親鳥は、「では、私のしつぽの羽を一枚お取りなさい。助けが必要になったとき、その羽をもやせば、すぐにあなたのもとにかけつけますから」といいました。

狩人は、ワシの羽を一枚取って、ポケットに入れました。それから、また狩りをして歩きましたが、その日もやつぱり、えものはいつぴきもとれませんでした。

つぎの日の夕方になって、ようやくきつねをいつぴき見つけました。狩人は、「ほお、いいところにあらわれたぞ」といて、ねらいを定めました。するときつねが、「どうぞ、わたしをうたないでください。かわりに、あなたのおのぞみの物をさしあげますから」といいました。狩人が、

「いつたい、何をくれるんだい」ときくと、きつねはいいました。

「どうぞ、わたしのせなかの毛を一本取ってください。助けが必要になったとき、その毛をもやせば、すぐにあなたのもとにかけつけますから」

狩人は、きつねのせなかから毛を一本ぬいてポケットに入れ、またどんどん歩いていきました。

やがて、ある国にやつてきました。その国のおひめさまは、なんでも見えるまほうの鏡を持っていました。おひめさまは、国じゅうに、こんなおふれを出していました。「わたしの目の前からすがたを消して、三日たつてもわたしが見つけられない人とけつこんします。もし、かくれているのが見つかつたら、その人は打ち首です」

これまでたくさんのおひめさまが挑戦しましたが、みな失敗しておひめさまに見つかり、打ち首にされました。おひめさまはその首で高い塔をたてさせました。

狩人はこれを聞くと、自分も挑戦してみることにしました。

狩人がお城に行くと、かくれるために三日間があたえられました。狩人は、はじめの二日間は、お酒を飲んで歌つたりおどつたりして楽しくすごしました。「三日たつたら、首を切られるんだぞ」と人にいわれても、狩人はただわらうばかりです。

三日目、狩人は、海辺へ出かけていつて、あの魚のうろこをもやしました。たちまち、大きな魚が泳いできて、

「なんのうろこ用ですか」とききました。

「ぼくを、かくしてくれ。だれにも見つけられないところへ」

魚は、狩人を飲みこんでのどの中にかくすと、深い海のそこへもぐつていきました。

おひめさまは、まほうの鏡をのぞいて世界じゅうさがしましたが、狩人は見つかりません。

「これで終わりだわ。あの人とけつこんしなくては」

ひとりごとをいいながら、おひめさまは、もういちど鏡をのぞきこみました。すると、深い海のそこに大きな魚がいっぴきいて、その魚ののどから、青いぼうしのふさかざりがちらつとのぞいていました。

「見つけたわ。魚ののどの中にいるわ」と、おひめさまはさけびました。

狩人がもどつてきて、

「どうです。わたしを見つけられましたか」とくくと、おひめさまは、

「あなたは、魚ののどの中にかくれていましたね」といいました。

「そのとおりです。しかたがありません。わたしの首を切つてください」けれども、おひめさまは、

「あなたほど上手にかくれた人は今までいませんでした。だから命はとりません。どうでも行つてしまいなさい」といいました。

しばらくすると、狩人は、

（もういちどおひめさまのところへ行つてためしてみよう。首がなくなつたつてかまいやしない）と考えました。そして、お城へ出かけていきました。

こんどは、狩人は、野原へ出て、ワシの羽をもやしました。たちまち、ワシがとんできて、

「なんのご用ですか」ととききました。

「ぼくを、かくしてくれ。だれにも見つけられないところへ」

ワシは、狩人をせなかに乗せて空高くまいあがり、天のはてまでとんでいきました。

おひめさまは、まほうの鏡をのぞいて世界じゅうさがしましたが、狩人は見つかりません。

「こんどこそ終わりだわ。あの人とけつこんしなくては」

そういうて、さいごにもういちど鏡をのぞきました。すると、天のはてをわしが一羽とんでいて、そのせなかで青いぼうしのふさかざりがひらひらしていました。

「見つけたわ」と、おひめさまはさけびました。

狩人がもどつてきて、

「わたしを見つけられましたか」ときくと、おひめさまは、

「あなたは、ワシのせなかに乗つていましたね」といいました。

「そのとおりです。さあ、わたしの首を切つてください」

けれども、おひめさまは、

「いいからお帰りなさい。こんども命を助けてあげましょう。でも、もう一度と来てはいけませんよ」といいました。

ところが、しばらくすると、狩人は、またお城に出かけていつて、「もういちどやつてみます。三度目も失敗したら、どうぞ心おきなくわたしの首を切つてください」といいました。

狩人は、こんどは森へ行つて、きつねの毛をもやしました。たちまち、きつねがあらわれて、

「なんのご用ですか」とききました。狩人は、きつねにいいました。

「ここからお城の中まで、あなをほつてくれないか。おひめさまが鏡を見るときすわる、いすの下までほつてほしいんだ」

きつねはすぐにあなをほりはじめました。あなができると、狩人はもぐつていつて、おひめさまのいすの下にかくれました。そして、おひめさまがしきりに鏡をのぞき、こんでいるあいだ、いすの下から、針はりでおひめさまのおしりをちくちくさしました。

おひめさまは、世界じゅうがしましたが、こんどはどうしても見つけられませんでした。

狩人がもどつてきて、

「どうですか。わたしを見つけられましたか」ときくと、おひめさまは、

「いいえ、見つけられなかつたわ。いつたいどこにかくれていたの」といいました。

「わたしは、あなたのいすの下にかくれていました。そして、あなたが鏡を見ているあいだ、針であなたをつづつきました」

おひめさまはそれをきくと、

「ああ、なんだかちくちくしたのはそれだったの」とさげびました。

こうして、狩人はおひめさまとけつこんして王さまになり、ふたりはいつまでもしあわせにくらしました。

* 狩人 鳥やけものをとつてくらしている人。

獵師 りょうし

出典『語りの森昔話集1 おんちよろちよろ』村上郁再話
原話『世界の民話13』小澤俊夫／ぎょうせい